

CHOSHI（第1話）

（令和3年6月）

『ピッチャー、川口。』

中学野球鹿嶋杯1回戦 0－0の4回表。清真中のエース川口がマウンドに上がった。

約1ヵ月半ぶりの登板だった。川口は中1からエースだったが、清真中は部員不足のために、近隣の中学校と合同チームを組んでいた。守備関係の練習不足から、負けることが多かった。

それでも川口は、中2で県東地区選抜選手に選ばれた。中2の秋、背が高くなったことで、球離れのタイミングにズレが生じ、右バッターのインコースのボールがシュート回転し、デットボールを与えることが多くなった。しかし、冬にフォームの修正し、徐々にコントロールが改善されていった。

中3の5月。それまで合同チームを組んでいた市内の中学校が1年生の入部により単独チームになり、合同チームは解消。中1生を入れても7名しかいない清真中は大会出場すら危ぶまれる状態になった。

中学野球部顧問の押見は部員が足りないチームとの合同チームを模索した。すると、神栖一中が中学3年生1名で、何名かの中学1年生が入部したが、単独チームは厳しいのではないかとという情報を得た。押見は神栖一中の野球部顧問の染谷先生に電話をした。『もしもし、押見です。今、合同チームになっていただける学校を探しています。もし、9名いないのであれば、清真と合同を組んでいただけないでしょうか？』染谷先生は快諾してくれた。押見は話しを続けた。『うちには県東選抜でピッチャーをしている川口がいます。しかし清真にはキャッチャー経験のある選手がいません。キャッチャーができる子はいませんか？』すると1年生の中に少年野球でピッチャーとキャッチャーをやっていた子がそれぞれいるので、できるかもという返事をいただいた。

翌週、第1回目の合同練習を行った。すると意外な人に会った。かつて、波崎の中学校を率いていた名将菅宮先生だ。『押見先生、久しぶり。しばらく現場から離れていましたが、よろしくお願いします。』すると名将は川口の方を見た。『あれが川口君か。早速、うちの1年生に捕らせよう。』ということで投球練習が始まった。

川口の投げるボールを神栖一中の1年生はいい音を立てて、軽快に捕った。『想像以上だな。』菅宮先生がつぶやいた。『押見先生、このチームの監督、俺にやらせてくれないか。』菅宮先生の目が昔の目に戻っていた。